

「国語と教養」を 軽視する愚かさ

混迷を極める時代に本当に求められる教養とは何か。
ともにリベラルアーツを掲げる大学で教えた経験をもつ
数学者と神学者が、学問領域を超えて語り尽くす



写真・大島拓也

ふじ わら まさ ひこ
藤原正彦

(お茶の水女子大学名誉教授)

1943年、旧満洲・新生まれ。東京大学理学部数学科卒業、理学博士。米国で3年間教えたのち、78年、数学者の視点から眺めた清新な留学記『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞、ユーモアと知性に根差した独自の随筆スタイルを確立する。父・新田次郎、母・藤原ていの次男。著書に『国家の品格』(新潮新書)、『本屋を守れ』(PHP新書)など多数。



写真・遠藤宏

もり もと
森本あんり

(東京女子大学学長)

1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学人文科学科卒業。東京神学大学院を経て、プリンストン神学大学院博士課程修了(Ph.D.)。専攻は組織神学。プリンストン神学大学客員教授、パークレー連合神学大学客員教授、国際基督教大学教授などを経て、2022年4月より現職。著書に『反知性主義』『不寛容論』(いずれも新潮選書)、『異端の時代』(岩波新書)など。

教養教育が軽視される日本の大学

森本 藤原先生とこうしてお話する機会をいただくのは初めてのことです。光栄であると同時に畏れ多い気持ちです。ご著書『国家と教養』（新潮新書）や『本屋を守れ』（PHP新書）などを拝読し、「そのとおり、そのとおり」と終始唸（うな）っておりました。

藤原 ありがとうございます。私も数年前、執筆中に森本先生の『反知性主義』（新潮選書）からピューリタンを勉強させていただきました。

森本 今日は、「リベラルアーツ」をテーマにお話できればと思います。藤原先生は長きにわたりお茶の水女子大学で教鞭（きょうべん）をとられ、私は昨年までICU（国際基督教大学）で教え、今年度からは東京女子大学で学長を務めています。いずれの大学もリベラルアーツ教育を実践している点で共通していますね。

藤原 そもそも、リベラルアーツという言葉は定義が曖昧（あいまい）ですね。一般的には「人文科学・社会科学・自然科学の横断的な教育」という意味で使われます。しかしそ

の捉え方は国や時代、さらには大学などによってさまざまです。

森本 リベラルアーツがなかなか理解されないのは、そもそもそれが「What（何か）」ではなく「How（どのように）」だからです。リベラルアーツは、哲学や数学、文学といった学問分野の集合名詞ではありません。求められているのは、教師の側がどのように教え、学生がどのような姿勢で学ぶかです。どんな分野でも、リベラルアーツ的に教えることもできるし、まったく違う精神で教えることもできる。

だから、知識を貯めて博学になることが目的ではありません。むしろ、得られた知識でその人自身が変わり、ものの見方や考え方が変わるところにこそ、リベラルアーツの本義がある。「教養を身につける」としばしばいわれますが、この言葉にも違和感があります。教養とはアクセサリーのようにつけたり外したりできるものではないでしょう。決して容易に備わるものではないからこそ、厳しい知的訓練を覚悟しなければなりません。

藤原 イギリスの中・上流階級の多くの子弟は十二歳

ごろからパブリックスクールでエリート教育を受け、「教養人」の素地を備えたうえでオックスブリッジ（オックスフォード大学とケンブリッジ大学の併称）などに進学します。彼らがやがて親になると、我が子にも自分と同じ道を歩ませる。そうして、紳士階級が継承されていくわけです。他方で、お金はあっても教養のない「成り上がり」は、紳士階級には入れません。そこで自分の世代は諦め、子どもをパブリックスクールに入れ、教養をつけさせます。こうして自分の次の世代から紳士階級の仲間入りをさせようとしています。

森本 英米と日本の教育では、リベラルアーツのWho、つまり誰が教えるかも違ってきます。日本では博士号を取りたての若手が一般教養科目を担当し、ベテランの教授が専門科目を教える風潮がありますよね。英米ではまったく逆です。優れた経験と経歴をもつその道の大家や看板教授こそが一般教養科目を教え、経験の浅い若手は専門科目を担当します。

リベラルアーツは、たんなる雑学の寄せ集めではありません。その道を極めた学者だからこそ伝えうる高度な

知の広がりをも、学問の入り口に立つ若者に提供するべきでしょう。もしもアインシュタインが各学部から集まった学生に「物理学とは何か」について講義をしたら、学生にはものすごく刺激的で啓発的な体験になるはずですよ。

藤原 私がアメリカのコロラド大学で講義を受けもっていたころも、大学一、二年生の一般教養科目の講義は老練な教授たちが担っていました。当時はまだ新米のPh.D.だった私は、大学院生を相手に専門の数学を教えていたものです。

森本 そうなんです。自分の専門を教えるだけなら、駆け出しの学者にもできるのです。ところが日本の大学では、逆の状況が生まれていますね。

藤原 おっしゃるとおりで、専門学部の教師が教養部の教師を下にみている節すらある。だから、教養部の教師はコンプレックスを抱き、専門学部に移ろうとする。この構造自体が愚かしいのであって、日本における教養教育を阻んでいる元凶でしょう。

森本 さらにいえば、いまの大学システムは、基本的には入学する段階で専門（学部）を決めなくてはなりません。

せん。これは大学自身が高等教育の意義を否定しているようなものです。「大学生の数年間に大きな知的変化は起こらない」という前提に立っているわけですから。

「医者になろうと思って医学部に入ってみただけれど、法律を学んで弁護士になりたくなかった」「世界平和に寄与するために国際関係を学んでいたら、むしろ経済や宗教の重要性に気づいた」などということは、大学でさまざまな経験をするれば山ほど起こりえます。

学生の興味・関心が移り変わる可能性を考慮するならば、入学後はまずは全員がさまざまな学問分野に触れるべきではないでしょうか。そこで他分野への視野を広げたいうえで、専門の学部を選び直せばいいわけです。

藤原 同感です。欧州ではギリシャ・ローマの時代より「自由七科」の伝統があります。文法、修辞学、弁証法の三学と、算術、幾何学、天文学、音楽の四科を学ぶことが自由人の条件だったのです。もともと当時の「自由人」とは「奴隷として売り買いされない人」という意味であって、必ずしも学問や思想の自由と同義ではありません。その後、中世に入ると欧米では自由七科に哲学

を加えた教養教育が大学で浸透し、現在に至るまでほぼ同じ枠組みが保たれています。

新渡戸稲造が唱えた道德と礼節

森本 日本と欧米のあいだで、教養教育と専門教育に対する見方が逆転しているのはじつに不思議です。その理由について、藤原先生はどのようにお考えですか。

藤原 明治維新以降、我が国では列強に必死に追いつこうと殖産興業が重視されました。その結果、短期的に成果がみえる教育ばかりが重宝され、教養教育が次第に疎かになったのでしょうか。

日本には元来、教養の中核を成す道德の精神が存在しました。十九世紀に活躍したイギリスの詩人エドウィン・アーノルドは、一八八九年に来日すると日本人の礼節や道德、風景、芸術の水準の高さを目の当たりにし、「地上で天国あるいは極楽に最も近い国だ」と称賛しています。しかし信じ難いことですが、当時の日本の新聞はアーノルドの言葉に批判的でした。日本の旧来的な要素にしか目を向けておらず、明治の工業発達の成果をみ

ていないというのが理由です。私なら卒倒してしまいそうに嬉しい言葉をアーノルドが残してくれたにもかかわらず、世論は冷ややかだったのです。当時からすでに、欧米の風潮に流された日本では道徳や礼節、教養を軽視する傾向が萌芽していたのでしよう。

森本 なるほど。問題の根源は、明治維新以降の成長至上主義にあるというわけですね。

藤原 森本先生が学長を務める東京女子大学の初代学長は、私が尊敬する新渡戸稲造先生です。彼も著書『武士道 (Bushido: The Soul of Japan)』で日本人が培った道徳と礼節について説いているように、武士道精神とは何も武士だけのものではありません。日本人のあいだに連綿と受け継がれてきた正義感や名誉、惻隠（憐み・同情）、情緒などは、歌舞伎や浄瑠璃、能や狂言を通して、江戸時代には庶民にまで根づいていました。

武士道精神を英語で世界に伝えた新渡戸先生の功績は紛れもありません。その半面、彼は一九〇六年に第一高等学校（東京大学教養学部の前身）の校長に就任して以降、西洋的な教育を推進して日本人を武士道から遠ざけ

る一因を自らつくってしまった。南部藩士の家に生まれた新渡戸先生にとっては、武士道精神は親から教わる当たり前の徳目であり、わざわざ学校で教える必要はないと考えてしまったのです。

明治生まれといっても、生まれが明治二十年（一八八七年）以前か以後かで考え方がかなり異なります。幕末から明治初めにかけて生まれた夏目漱石や森鷗外、西田幾多郎などは武士道精神を重んじており、日本の国柄に敏感でした。一方で明治二十年前後に生まれた和辻哲郎や芥川龍之介、志賀直哉などは欧米の思想に傾倒しました。一高で新渡戸先生の聲咳に接した人びとが主となって大正デモクラシーを牽引しましたが、それまでの教養の中核たる武士道精神から離れてしまいました。彼らが素晴らしい功績を残したことは確かですが、日本が誇る武士道精神が等閑に付されていったのはいかにも残念なことです。

森本 新渡戸先生に関しては、台湾総督府の技師として、同地の殖産興業発展に寄与した功績も語られます。ただし研究者のあいだでは、その働きについて賛否両論

があるようです。植民地主義に反対しておきながら、自らはその政策に加担しているのではないかという批判があるのです。

藤原 たしかに、新渡戸先生の弟子である矢内原忠雄先生（東京大学総長）は、植民地主義に猛反対してしましたからね。新渡戸先生に関してはさまざまな評価があるでしょうが、日本人の礎を成す武士道精神を世界に広めた側面は、断固として評価すべきでしょう。

大学教育の目的は民主的な市民の形成

森本 藤原先生が強調される「品格」は、私の言葉では「礼節」に当たるかと思いますが、それはまさしくリベラルアーツ教育の目的に関わってきます。今日の大学の意義は、学者や専門家を育てることではありません。大学教育が一般化した時代に、そもそも学部教育だけで専門家になれるはずがない。では大学教育の主な目的は何か。それは民主的な市民をつくることです。民主主義社会では多様な意見が存在するため、自分と異なる意見をすべて否定していたのでは共存できません。現在の情

勢に重ねても、ジェンダーやワクチン接種、ウクライナ戦争について、さまざまな立場や意見があります。

拙著『不寛容論』（新潮選書）に書いたことですが、たとえ相手と見解が違っても礼節を保ち、冷静に話し合うためには、リベラルアーツ教育が不可欠です。聞いて共感する力、自分の考えを批判的に検討する力、そして相手にわかるように自分を表現する力。それらがなければ、民主的社会なんて簡単に壊れてしまいます。世界で権威主義が横行するいまこそ、民主的な市民の育成をめざす教育が必要ではないでしょうか。

藤原 民主主義における教養という文脈では、十九世紀フランスの政治思想家アレクシ・ド・トクヴィルの話を思い出します。彼は十九世紀初頭にアメリカを旅して著した『アメリカのデモクラシー』のなかで、同国の先進的な民主主義を称賛しつつも、将来的には大衆による世論の腐敗が起こりうると述べている。トクヴィルにいわせれば、当時のアメリカ市民にはまだ礼節や教養が根づいていなかった。近年のアメリカではポピュリズムの蔓延が指摘されていますが、その状況をトクヴィルは二

百年も前から洞察していたわけです。

英語教育以前に国語力をつけよ

森本 教養やリベラルアーツというのと、しばしば「グローバルに戦える人材を育てる必要がある」「だからこそ英語教育が大事だ」という議論が交わされますね。もちろん、大前提として英語を学ぶことは大切です。ゲーテが「一つの言語しか知らない人はどの言語も知らない」という言葉を残したように、多言語に触れることは異質な価値観に接することであり、他者への理解にもつながります。

しかし私は、じつのところ幼少期からの英語教育には反対なんです。英語を勉強すること自体は否定しないけれども、それは二の次、三の次でいい。それよりも優先すべきは、日本語が母語なら、その母語で「考える力」を養うことです。小さいころから日本語の本を読み書きして思考を深める時間が何よりも重要だと思いますね。

藤原 おっしゃるとおり。初等教育で英語を教え始めたのが最悪の間違いです。幼少・児童期は、思考力と

もに人間にとって最も大切な情緒を培ううえで重要な時期です。絵本や童話、小説や詩を読んで、心を揺さぶられたり、涙を流したりする。このように、英語などには脇目も振らずにひたすら情緒を吹き入れるべきです。この二度と得られない時期を外国語の教育などに費やしては、教養など育つわけがありません。

森本 母語は「思考の言語」です。どんなに英語の会話が上手になっても、自分の頭の中にないものをしゃべることは不可能です。母語の能力以上に外国語で話すことはできませんから。

藤原 以前に著した『祖国とは国語』（新潮文庫）の題名が私の一貫した持論です。昨今のお話でいえば、ロシア軍に制圧されたウクライナの東部地域では、すでにロシア語教育が始まっていると聞きます。母語を奪うことは、ある意味では領土を奪うよりも残酷な行為です。領土とは違い、子どもの頭に植えつけられた言葉は元には戻りません。

国語力は国防にも関わります。にもかかわらず、英語教育への偏重をはじめ、なぜ日本の学校教育は進んで欧

米流に染まろうとし続けているのか。文科省というよりも財界が元凶です。グローバルな企業戦士を求める財界と経産省の思惑が一致し、結託して政府の教育方針に影響を及ぼそうとしているのでしょう。

森本 グローバルな交渉の場に立ったとき、英語が上手ければ首尾よく進むか。決してそんなことはありません。結局のところ、みられているのは人間として信頼できるかどうかです。交渉相手が契約書の裏をかいてごまかしたり嘘をついたりするような人間かどうか。英語が話せるに越したことはありませんが、そのうえで大事なものは、その人が人間として信頼できるかどうかです。

藤原 生前の岡崎久彦さん（元駐タイ大使）に「外交官として最終的に大事なものは何ですか」と尋ねたら、言下に「教養と人間性」と答えていましたよ。

森本 まさにリベラルアーツですね。

藤原 私がケンブリッジ大学で教えていたときも、同僚や学生の文系・理系を問わない教養の厚みに驚いたことが多々あります。フィールズ賞を受賞したジョン・G・トンプソン教授は、初対面で開口一番、「三島由紀

夫の切腹と夏目漱石の『ころ』に出てくる先生の自殺の關係は」と私に尋ねてきました（笑）。

森本 なんと（笑）。しかも、これが数学者同士の会話というから、いやはや驚きです。英語を学ぶ以前に国語や日本の文化、歴史についての見識も深めていないと「グローバル人材」とはとうていいえませぬね。

デジタル本にはない、印刷物の価値

藤原 もう一つ、政府の教育政策の大きな過ちあやまを指摘すると、デジタル教育を推進している点です。これも世界の潮流を後追いする財界の思惑が背後にあるはずで、PISA（学習到達度調査）などを通し、デジタル教育を推進するOECDは日本語で「経済協力開発機構」。つまり、発祥からして経済に奉仕するための機関であり、財界と親しいのは当然です。

教科書をタブレット端末などに頼ったては、教養にとつて最も大切な「本への親しみ」が、子どもたちからますます失われてしまう。読書量が減れば、読解力や思考力は確実に衰退します。私は印刷物の匂いフェチで、

小学生のころは新学期に新しい教科書をもらうと、必ずクンクン嗅いでいたものですよ。音読の最中まで匂いに熱中するあまり、陸軍上がりの教師に「何やってんだ、バカヤロー」と叱られました（笑）。

森本 それは凄い（笑）。

藤原 匂いや手触りがあるからこそ記憶に残り、昔の思い出がまざまざと甦ってくる。タブレット端末の教育ではありえないことです。

森本 私もそう思います。要するに物理的な存在自体が大事なんですよね。デジタル本はどこでも読めて物理的な制約がなく、たしかに利便性は高い。しかし、人間にとって本当に重要なのは、むしろ不便さや限定性ではないでしょうか。そもそも人間は寿命がある有限な存在であるからこそ、自分の限界を知るし、自己を認識できる。そして、限界の外には何があるのだろうかとう想像を巡らすわけです。本だって、手元になくて不便だと思っても、その不在性が想像力を刺激して新たなつながりや展開を示唆してくれることがよくあります。

藤原 デジタル本で何を読んだのかは、コンピュータ

のなかに一覽として残るけれども、人間の記憶に残りづらい。一方で本棚の書物は、「この表紙の色が印象深い」「あのとき読み込んでいた汚れや傷がある」という具合に、一冊ごとに付随した物語があります。だから忘れな

森本 匂いや手触り、もしくは友人や恋人と貸し借りした際に残った書き込みが、多くを思い出させてくれます。あるいは藤原先生の著作を読みながら書き込んで、本の内容と自分の考えを比較する。こうしたリアルな営みこそが、人間の想像力や情緒、ひいてはクリエイティブティの源泉となるはず

人間特有の情緒と美的感覚

藤原 世界に冠たる日本の数学者・岡潔は、数学の難問を解くために必要なのは「情緒力」だと断言しました。彼は多変数解析関数の分野における世界の三大問題をすべて独力で解き明かした天才で、世界の数学者が「オカキヨシ」とは一人ではなく、数学者の集団ではないかと思つたほどの人物です。その岡が三大問題に挑戦

する前にまず取り組んだのは、数学ではなく蕉門（俳人・松尾芭蕉の門流）の俳諧の研究でした。常人には理解し難い発想ですが、情緒の力なくして三天問題は解けないと直観したのでしょう。「わびさび」や「もののあわれ」を探求することが世界的偉業につながったわけで、私たちは岡の姿勢から多くを学ぶべきです。

森本 数学者はやはり特別というか、じつに斬新奇抜ですね。本当の飛び抜けた天才だけに開かれる世界です。

藤原 数学にとって重要なのは、論理よりも美を発見する感受性なんです。正しい解法はつねにシンプルで美しい。三角形の内角の和が一八〇度という定理は、たとえ地球が減ほうと変わらない。

この真理をみつける美的感覚は人間固有のもので、AI（人工知能）には決して備わっていません。先ほど森本先生が人間の有限性について触れましたが、すべての人は永遠に生きられず、死という限定を抱えていることが、悲しみや怖れ、はかなさなど情緒の根源です。ところがコンピュータには情緒がないから、いくら計算能力が高くても数学的な発見はできません。

森本 なるほど。今後いくら技術が発達しても、AIには数学的な新発見はできないのでしょうか。

藤原 無理だと思います。AIに無数の俳句はつくれても、最も優れた一句を選ぶことはできない。情緒が求められる数学はまさにアートであり、リベラルアーツが求められる学問といえるでしょうね。

森本 私の専門である神学は、じつはリベラルアーツにとって重要な「批判する力」に直結する学問です。神学とは教会の教義を批判的に見直す営みですから、教会はむしろ疑惑の目を向けていました。そういう緊張関係があったからこそ、大学という制度が確立し、学問が進んだのです。宗教を学ぶと、その国の思想の根源をつかむことができます。たとえばアメリカを批判するには、その国のキリスト教を批判する歴史的視点が不可欠です。現在なら、とくにプーチン大統領を無批判に支持するロシア正教会をどう理解するかが非常に重要です。

現在のような危機の時代だからこそ、どの学問を学ぶかではなく、「誰がどう学ぶか」というリベラルアーツの本質と真価が問われるはずですよ。